義援金寄付行動に関する探索的研究

友野 隆成

(宮城学院女子大学学芸学部)

キーワード: 援助行動, 東日本大震災, 義援金

The exploratory study of donation behavior

Takanari TOMONO

(Department of Psychological and Behavioral Science, Miyagi Gakuin Women's University)

Key Words: helping behavior, Great East Japan Earthquake, donation

目 的

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災発生以後, 被災地支援のために様々な活動が行われている。例えば, 直接的な支援として, 瓦礫撤去・傾聴・炊き出しなど被災地へ出向いて実施する種々のボランティア活動が挙げられる。しかし, これらのボランティア活動を実際に行うのには様々な制約があり, 手軽にできる活動であるとは言い難い。

一方, 直接的に被災地を支援することができなくても, 義援金を送るという間接的な方法も考えられうる。義援金の寄付は本人の気持ちひとつで手軽にできる被災地支援であり, 震災発生直後から今日までに多くの義援金が集まっている。しかし, 時間の経過とともに被災地の様子が報道されなくなっていくと, 人々の関心も徐々に薄れ, 義援金の寄付も少なくなっていくことが想定される。復興には長い年月が掛かることは想像に難くなく, ある種義援金寄付ブームのような一過的なものではなく, 五年, 十年と継続可能な支援が求められる。

そこで, 本研究では東日本大震災に関する義援金寄付行動についての簡便な実験および調査を行い, 持続可能な被災地支援に資する義援金寄付行動を促進するための一助として, どのような要因が影響を与えているのかを探索的に検討することを目的とする。

方 法

研究協力者

研究協力者は, 宮城学院女子大学 2011 年度大学祭来場者のうち, 義援金を寄付した 593 名であった。また, そのうちアンケートに回答したのは 290 名(男性 174 名, 女性 112 名, 不明 4 名; 平均年齢=21.94 歳, SD=8.07 歳)であり, 回答率は 48.9%であった。

実施方法

大学祭実施会場の校舎の廊下の一角にブースを設け, 仕掛けを施した募金箱(仕掛け有条件)と仕掛けを施していない募金箱(仕掛け無条件)を並べて設置した。仕掛け有条件と仕掛け無条件ともに, 2 種類の募金箱(A・B)をそれぞれ用意した。実験者は, 一般の義援金募集活動と同様の声掛けを行い, 研究協力者に仕掛け有条件と仕掛け無条件のいずれか一方の募金箱に任意の金額を投入してもらった。さらに, 研究協力者から同意が得られた場合, 以下に示すアンケート用紙に回答してもらった。なお, 本研究で行った義援金募集活動計 6 時間のうち, 最初仕掛け有条件は募金箱 A, 仕掛け無条件は募金箱 B を設置し, 3 時間経過後に仕掛け有条件は募金箱 B, 仕掛け無条件は募金箱 A に入れ替えて設置した。

測度

性別, 年齢, 出身地・現住所(どちらも都道府県名), 宮城学院の在籍経験の有無, 義援金寄付の動機, 過去の義援金寄付経験の有無, 寄付した募金額, 義援金の使途希望, 寄付した募金箱の選択理由, 感想を尋ねるアンケート用紙を用いた。

また, 実際にそれぞれの募金箱に投入された募金額を集計した。

結 果

仕掛けの有無による募金額の差異

研究協力者が実際に投入した募金額を集計し, 仕掛けの有無および前・後半に分けてそれぞれ Figure 1. に図示した。なお, 総募金額は仕掛け有条件が 7,951 円, 仕掛け無条件が 13,447 円であった。

Figure 1. 仕掛けの有無および時間帯ごとの募金額
各デモグラフィック変数と申告された募金額との関連性

アンケートで測定されたデモグラフィック変数のうち 2 値をとるものをそれぞれ独立変数, 寄付した募金額を従属変数とする対応のない t 検定を行った結果, 性別 ($t(275)=2.17$, $p<.05$), 宮城学院の在籍経験の有無 ($t(270)=3.78$, $p<.001$), で有意差が認められ, 女性よりも男性の方が, 在籍経験のある人よりもいない人の方が, それぞれ有意に多い募金額を申告していた。一方, 過去の義援金寄付経験の有無には有意差は認められなかった ($t(267)=1.55$, $n.s.$)。

考 察

本研究では, 仕掛け無条件の方が仕掛け有条件よりも義援金が寄付されやすいこと, また, 同じ仕掛け有条件でも募金箱の種類によって募金額が異なることが示された。さらに, 宮城学院に縁のない者ほど, 多く募金することも示された。

しかし, 本研究で用いた募金箱は研究協力者ごとの募金額を出すことができない構造で検定にかけることができなかった点, また, 女子大学で開催される大学祭という特殊な状況で実施された点, アンケートで尋ねた募金額はあくまで自己申告で, 実際に投入された募金額を保証できない点などから, 結果の一般化には大幅な制限がかけられてしまうことが考えられる。今後は, 本研究で得られた基礎データをもとに, より精緻化された研究の実施が望まれる。

注)本研究は, 筆者の指導のもとに宮城学院女子大学学芸学部心理行動科学科の必修科目である「心理行動実践セミナー」の一環として実施されたものである。なお, 本研究において集まった義援金は, 被災 3 県(岩手県・宮城県・福島県)のうち被害が大きい割に義援金配分の少なかった岩手県にすべて寄付された。本研究を遂行するにあたり, 実験者として参加した受講生, および義援金を寄付していただいた研究協力者の方々に感謝申し上げる。